

# 絆

## KIZUNA

中央大学公認会計士会会報

NO. 1

### 創刊号に寄せて

中央大学 学長  
外間 寛



中央大学公認会計士会の設立、そしてこの機関誌の発刊を心からお祝い申し上げます。関係者のご努力に対し深甚なる敬意を表します。この会は、母校からより多くの公認会計士が輩出することを願い、後輩の公認会計士試験受験を側面から援助することを目的の1つとして設立されたということでもあります。公認会計士を目指す学生諸君にとって、この会の発足はきっと大きな声援となることでしょう。また大学としても、会員の皆様の母校愛と後輩への温い思いやりに深く感謝しております。そして川北会長のご指導の下、会員全員の協力によってこの会が大きく発展するようにと願っています。

中央大学は、司法試験とともに公認会計士試験においても、毎年多数の合格者を出していることで有名です。これは、中央大学に対する高い社会的評価を支える大きな柱となっています。しかし近年、両試験いずれにおいても、中大からの合格者数が大学間で3位ないし4位という状況にあります。両試験ともに常に1位を保っていたひとところに較べると、やや勢いが衰えたという感を免れません。学会会でもしばしばこのことが取り上げられ、大学当局に対して厳しい要望がなされることが少なくありません。大学としてももちろん現在の状況を真剣に受け止めて、カリキュラムの見

直し、経理研究所・法職講座に対する支援など、さまざまな努力を重ねているところであります。

中央大学としては、単に公認会計士試験・司法試験が超難関の国家試験であるから、その合格者の数を増やしたいと考えているわけではありません。われわれの狙いはいうまでもなく公認会計士・法曹という高度の専門職業に多数の優れた人材を供給するということです。国家・社会は、良質の公認会計士・法曹を必要とします。その質が国家・社会そのものの質を左右するでしょう。また今日の国際化した国家・社会においては、これらの専門職業の任務は国際的な広がりを持ち、国際秩序の形成に大きな関わりをもつに至っています。中央大学は、これらの専門職業の分野における人材の養成について大きな役割を果たしてきました。この実績が実学を重んずるわが中央大学の誇るべき伝統となっています。われわれは、これを継承し、そしてますます発展させていかなければなりません。

もっとも、今日の中央大学は総合大学であり、実学一辺倒ではありません。実用を直接の目的としない学問分野の研究教育が多面的かつ広範囲に展開されています。人類の知見を広げ、思索を深めるという純粋な学問上の営為が大学の質を高めます。新しい総合政策学部は、新しい学問体系を

打ち立てようという野心的な構想のもとに設立されました。既設の学部にも新学科が増設されるなど、いま中央大学は総合大学として大きな飛躍をとげようとしています。「21世紀には中央大学を日本一の私立大学にしよう」が合言葉になっています。

中央大学がどんな新しい姿に脱皮するにせよ、

しかしその中に実学の伝統を適切に位置づけなければいけないと思います。他の学問、そして新たな学問の進展に留意しつつ、実学もますます自らを洗練していかなければならないでしょう。そうすることによって、国家・社会の必要とする専門職業の世界により良い人材を提供することができるよう努力を続けていきたいと思っています。

## 機関誌の発刊を祝して

中央大学商学部長  
松本正徳



今般、中央大学学会の支部である中央大学公認会計士の機関誌が発刊されることになり、心からお喜び申し上げます。また、貴誌の創刊に際し、お祝いの言葉を述べさせていただきますことは、私にとりましてこの上もない光栄と存じております。

創立以来百有余年の歴史と輝かしい伝統を持つわが中央大学では、これまでに官界や財界さらに学界等に多数の有能な人材を送り出し、わが国の発展のために多大な貢献を果たしてまいりました。とりわけ、商学部からは公認会計士をはじめとする職業的会計人を多数送り出し、天下に中央大学商学部の名を高めてまいりました。駿河台時代はもとよりのこと、多摩に移転した現在でも、多数の才能あふれる若者たちが、難関として知られている公認会計士試験をパスすることを目指し、わが白門をたたいてまいりました。今でも多くの学生たちが将来の公認会計士を夢見て、日夜厳しい研鑽を積んでおります。社会で活躍されている諸先輩の姿は彼らにとっては何よりの励みであり、心のささえになっているのです。私達は今後とも多数の公認会計士が白門から巣立っていくことを確信しておりますし、そのための努力を重ねていくつもりであります。ちなみに、平成5年の第二次試験でいえば、早大、慶大について第3位、東

大とならんで47名の合格者を出しております。早大、慶大が前年に比べると10名程度の減員となっているのに対して、中央大学では7名の増員となっており、おおいに健闘しているといえます。

わが国で公認会計士法が公布され、公認会計士制度が発足したのは昭和23年であり、また、監査制度の法的基盤が確立したのは、昭和25年からでした。特に昭和39年からわが国経済を襲った不況では、いわゆる大型倒産が続出し、大企業の経営者の安易な経営方針や粉飾決算などが社会的な問題となりました。そうした中で、公認会計士の果たす社会的責任があらためて注目をあびたものです。公認会計士法が公布された頃は有資格者は約250名でしたが、今や公認会計士はもっともやりがいのある職業の一つとして評価され、多くの英才を集めております。なかでも、わが中央大学から巣立った公認会計士は大きな山脈を作り、日本公認会計士協会のなかで重きをなしております。

現在、ゼネコン汚職等にもみられますように、企業の倫理、経営者の社会的責任が、国民からも厳しく問われております。客観的な第三者としての立場から優れた見識と卓越した技法によって企業の実績を監査し、その結果を公表するとともに、企業や経営者の守るべき行動基準や社会的責任の何たるかを指導し、国民にとってあるべき企業の

姿をあきらかにする責任を果たす公認会計士の職務は、今後ますます重要性を増すことと思われます。

それとともに、日本の企業は急速にグローバル化を進めて来ており、国際的にも大きな役割を果たしております。そのことは、同時に日本の企業が国際的にも大きな責任を負い、具体的な形で国際的貢献を果たしていかなくてはならないことでもあります。とかく批判の多い日本企業の国際的活動を適正に監査し、そのあるべき姿を指導していくことも、これからの公認会計士には重要な職務になります。また、最近では監査の対象も、企業のみならず大学等にも拡大され、公認会計士にはますます大きな責任が負わされるとともに、広い視野に立った見識と国際的な活動とが、一層必要になるものと思われます。

## 公認会計士試験への取組み

中央大学公認会計士会の機関誌の創刊を心から喜び申し上げます。

中央大学公認会計士会は、昨年の創立以来、講演会の開催・公認会計士を目指す学生への援助など活発に活動され、さらにこの度は機関誌の創刊の運びとなりました。この間の関係各位のご努力に深甚の敬意を表するものであります。

今年の公認会計士第二次試験の中央大学関係者の合格者は47名でありました。昨年は、全体の合格者が増加したにもかかわらず、中央大学では減少し、先輩諸氏に多大のご心配をおかけしたのでありますが、今年は、全体の合格者が減少するなかで、中央大学は東大と並んで合格者を伸ばすことができました。また、このところ現役の合格者が徐々にではありますが、増えてきています。かつてのトップを独走した栄光の時代と比べれば、

中央大学の商学部では、平成5年11月に新たに金融学科を設置しまして、従来の経営学科、会計学科、商業貿易学科に加えて、激しく変化する現在の要請に適した、豊かな能力を持つ人材を育て上げていく体制を確立いたしました。今後とも、社会の発展に貢献する優れた人材を世に送り出すとともに、広い視野と深い専門的知識を持ち、時代をリードする実力を身につけた公認会計士を育てていくことも、私達の責任の重要な一部であると考えております。

諸先輩におかれましても、後輩の育成に一層の御協力と御支援とを賜われますよう、改めてお願いいたします。

各位のますますの御活躍と御研鑽とを祈念しつつ、簡単ではございますが、お祝いの辞とさせていただきます。



中央大学経理研究所所長  
渡部 裕 巨

93年1月26日講演会にて

まだまだ不満足ではありますが、少し明るい兆しが見えてきたのではないかと考えています。

ご存じのように、公認会計士第二次試験の試験科目は会計科目の4科目と商法、経済学、経営学（平成7年度からは民法が加わり、経済学・経営学・民法のうち2科目選択となります）であり、いずれも経済学部・商学部の学生にとっては必須の科目であります。したがって、公認会計士試験のための受験勉強は、本来の大学教育と矛盾するものではないはずであります。確かに、一頃は重箱の隅をつつくような、断片的な知識を問う問題が出題され、それに対応するための詰込み教育が幅をきかせ、大学の教育にはなじまない傾向がみられたことは否定できませんが、近年は断片的な知識量よりも理解力を問う問題へと変化しつつあり、大学教育の理念からしても喜ばしい現象であ

ります。本来、公認会計士は、断片的な知識の集積よりは、習得した知識を動員して問題に対する解決の方途を論理的体系的に究明することを任務とするのでありますから、試験に当たっても試験科目のそれぞれの論理体系の理解度が問われてしかるべきであります。中央大学では、こうした見地から、公認会計士を目指す学生諸君の教育をしているのであります。

中央大学は、大学紛争を契機とし、その後多摩移転と相俟って、合格者が減少したのでありますが、この間、大学が全く手を拱いていたわけではありません。多摩移転後は、それまで商学部を設置されていた公認会計士講座を経理研究所に移管し、大学の援助を受けながら受験生の指導に当たってきたのであります。曲がりなりにも第3位を確保してきたのは、その成果といえます。現在も引き続いて経理研究所が指導に当たっています。

経理研究所は、多摩校舎では学生を対象に簿記会計講座と公認会計士講座を課外講座として設置しています。簿記会計講座は、主として新入生を対象とした簿記講座で、簿記の初歩から始めて日本商工会議所の簿記検定試験の1級合格を目指しています。中央大学の公認会計士の合格者が最近伸び悩んでいるのは受験者層が薄くなっていることにも起因しているのではないかと推測されますので、経理研究所では、公認会計士を目指す学生

を簿記会計講座に収容し、受験戦線に止まる学生の増加を計っているのであります。幸い受講する学生数がここ数年増加する傾向にあります。簿記会計講座を終了した後は、公認会計士講座が用意されています。ここで公認会計士試験の受験指導を行っています。このほかにかつて駿河台時代に大きな成果を挙げた特別研究生制度を真似て特別研究生コースを設け、有望な学生の特訓もしています。

近年、専門学校に通い詰めるいわゆるダブル・スクール化している学生が増えてきています。専門学校は受験情報・教育システムで優れているので利用するのは一向に構わないのでありますが、専門学校に行ききりになってゼミすら履修しない学生では困るのであります。そこで、経理研究所では、いずれの講座も正規の授業終了後に課外講座として開設し、授業と受験勉強との両立を計るよう腐心しています。最近の合格者に現役やゼミの履修者が多くなってきているのはその成果ともいえますが、この傾向をなんとか拡大したいと念じています。

最後に学生諸君はそれぞれ公認会計士を目指して日夜勉学に励んでおりますので、先輩諸氏におかれましても、何卒、一層のご支援をいただきますよう宜しくお願い申し上げます。

## 中央大学公認会計士会に期待するもの

中央大学名誉教授  
中央大学学員会副会長  
井上達雄



「中央大学公認会計士会を学員会支部として設立したので、これを発展充実するための記念行事として機関誌を発刊することにしたが、その一部に先生の経理研究所当時の思い出と中大公認会計士会への期待の言葉を書いてくれ」との増田氏の申し出で、もう大方忘れた昔のことを思い出し

つつ記すことにした。

### 1. 経理研究所設立当時のこと

昭和23年7月に公認会計士法が制定、公布された。この法律では、弁護士試験制度と同様に、当時の同種業者には特別の恩典があった。すなわち、従来計理士や税務代理士等（其他大学の会

計担当教授や、大会社の経理課長等)で3年以上従事している者には、特別試験制度があり、これに合格した者は直ちに公認会計士になれた。

そこで、中央大学卒業生で、税務代理士や計理士の資格を有する者が相集り、特別試験を受けるための準備講座を大学内に設けてくれとの要望が澎湃として起ってきた。よって私は当時商学部の教授でしたが、たまたま、中央大学税務会計講習所という任意団体があり、私と同様参与であった青木茂康君と溝田澄人君(二人とも税務代理士兼計理士であった)と相計り、これらの要望に応じて、中央大学理事に相談して、特別試験の講座を作ることになった。

この講座を実行する機関が中央大学経理研究所であり、当時明大、専修大、日大などはすでに経理研究所が設置されており、中大にも研究所を作りたいという強い希望があったが、まだ大学の正規のものではなく、任意団体の試験準備講座に過ぎなかった。

経理研究所の所長には太田哲三先生を推載し、私は副所長とされ、青木、溝田の両君は参与ということで、事務局は高橋氏(卓球部の監督であった)を委託して出発した。研究所は大学当局の許可のもと、駿河台校舎の田図書館の地下室を教室とした。特別試験の科目は「会計実務」と「監査実務」であったので、この科目に合う有名な先生方(太田先生、黒沢先生はもちろん)をお願いして、昭和23年11月に、夜間講義が始まった。

初めは中央大学卒業生のみに限られたが、次第に増加し、隆盛をきわめ、そのような制限はできなくなって一般化され、遂には遠く大阪や名古屋から列車で通う人も相当数いた。

最初の特別試験は24年7月施行され、230名の合格者が発表された。その多くは研究所の講義を受けた者であった。私も親しく友人となった聴講生とともに、「自分で講義しながら落ちるようでは仕様がなない」などといいながら、一緒に受験し、幸に合格した。

研究所は翌24年に、特別試験講座のほかに、公認会計士第二次試験の受験志望者のための準備と

して、「高等経理科」を設け、そしてさらに、税理士試験制度もできたので、その準備のため「税務会計科」も特設された。

経理研究所は、昭和25年4月1日に中央大学の正規の研究所となったので、任意団体としての旧中央大学経理研究所は廃止され、新しい中央大学経理研究所が生まれ、猪狩氏が職員として事務局にきた。しかし中央大学の常務理事は「研究所維持のための資金は出さないよ、しかし特に大学に金を納めないでもよい。」ということで、所長は同様太田先生、参与は、前参与の二人とともに私を入れて、三人で運営し、私は研究部長も兼ねることになった。今までの特別試験講座に、高等経理科と税務会計科が主なる講座として継続された。昭和26年には菅原達雄君が入り、管理運営は次第に円滑に発展していった。

高等経理科は、公認会計士第二次試験の科目のすべてを設置し、当時試験委員その他有名な学者を網羅して講義が進められたので、聴講を受ける者は非常によく勉強もしたが、合格者はきわめて多数であった。したがって、都下の各大学から、公認会計士を志望する学生の多くが、夜間通ってきた。

中大の学生は、経理研究所を利用することに便利であったせいか、中央大学の在学学生および卒業生の二次試験の合格者数はきわめて多く、公認会計士第二次試験合格者は、一橋大学と中央大学が初めの10年間は正確に交互に1位となった。しかし11年日以後は、10年以上、第二次試験の大学別合格者数を大蔵省が発表させなくなるまで、1年も欠けることなく、中大が第1位を占めていたのである。

この当時においては、司法試験についても、中央大学は東京大学を抜いて第1位を保っていた。中央大学がこれら国家試験にきわめて強かったのは、これら法律や会計の方向を志望する有能な学生が、勉学と研究を常にたゆまず進めた努力のせいではあろうが、大学内にも、それらの方向に進進して行こうとする学生の希望を相容れ、これを推進し励ます確固とした空気があったのだと思う。



## 2. 公認会計士会のこと

もう与えられた枚数もなくなったが、昭和24年には日本公認会計士協会が設立され、私も常任理事などになったが、大学教育の方に専念していたので、専門家の方々にまかせ、後は監事となり遠のいていった。

そして中央大学公認会計士会も、何時設立されたか私にはわからなくなったが、先輩の佐藤善助氏や石津四郎氏などのご努力で設立され、運営されていった。そして32年4月にどのようないきさつか、全く忘れていますが、その会長におかれている。しかしこの当時は商学部の教育研究にきわめて忙がしい時期であり、困っていた。かくて考えたすえ当時の中大卒業の会計士の有力者達に相談して、昭和35年に公認会計士と税理士を一丸とした団体、中央大学会計人会を設立することになり、

その会長には村田義男氏が就任した。これは、中央大学出身の公認会計士と税理士がそれぞれ独立した発展と充実をねがう意味から、後に適当な方策ではなかったのではないかと思った。しかし、今や公認会計士は、改めて中央大学公認会計士会を結成した。すっきりしたいいい体形となったと思う。

そして今や中央大学学会には、中央大学会計人会、白門会計クラブ、白門会計研究会および中央大学公認会計士会の四つが、中央大学卒業の会計士の学会支部となっている。四つの各支部は、一緒になって大学および学会の発展のためにいろいろな努力をお願いしたい。そして学生や卒業生の公認会計士および税理士への志望者の合格者をも増やすために、種々企画し、事業を行い、そして経理研究所の努力に援助を与えてくれることを祈念する。

# 公認会計士協会と中央大学出身公認会計士

## 日本公認会計士協会 会長 山本 秀夫



このたび中央大学公認会計士会会報第1号の発刊に当り、執筆の機会を与えられ、心から喜んでる次第です。

日本公認会計士協会の役職にあるため、首題が与えられたものと思いますので、協会の現状と中央大学出身公認会計士の活躍ぶり等をここでご報告させて頂きたいと思ひます。

〔日本公認会計士協会の現況〕

### 1. 歴史

日本公認会計士協会は、昭和24年10月22日第1回特別公認会計士試験合格者60名のうちの52名が出席して創立総会が開催され、任意団体として発足致しましたが、そこで選任された6名の常務理事のうちわが井上達雄先生がおられます。

続いて、社団法人への改組の意見が強まり、昭和28年3月7日社団法人日本公認会計士協会創立

総会が開催され、会長には太田哲三先生が就任されました。

その後昭和40年代に入り、山陽特殊製鋼問題を契機として監査制度の強化の気運が高まり、公認会計士法の改正が行われ、監査法人制度の新設、協会の特殊法人化が法定され、昭和41年11月15日特殊法人としての協会の設立総会が開催され、会長に井口太郎先生が就任されました。その時の会員数は会員3112名、準会員377名計3489名でした。

### 2. 目的と使命

公認会計士法第43条第2項に協会の目的が次のように定められています。

「協会は、公認会計士の品位を保持し、第2条第1項の業務（財務諸表の監査又は証明業務）の改善進歩を図るため、会員の指導、連絡及び監督に関する事務を行ない、並びに公認会計士及び会

計士補の登録に関する事務を行なうことを目的とする。」

これを受けて協会会則第1条において同様の定めをし、第3条において11項目にわたる協会の行うべき事業を定め、それに基づいて協会活動が行われております。

### 3. 現状

現在の協会は、会員10,004名（監査法人を含む。）準会員2547名合計12,541名（平成5年9月30日現在）で、特殊法人設立時の3.7倍となり、会員だけでも1万人を越える規模となっております。

組織は本部に会長1名、副会長7名、常務理事31名、理事40名、監事6名、事務総長1名の計86名の役員と、会則上の6つの審査会、調査会等と17の常任委員会、2つの特別委員会で約500名、12のプロジェクトチーム、7つの検討会、懇談会で延約300名の会員が構成員となり、常勤の事務総長を除きすべてボランティアで約90名の事務局職員の援助を受けながら会務を執行しております。

そのほか13の支部（地域会）があり、それぞれの地域において会長、副会長、幹事、監事が多数活躍しております。

#### 〔中央大学出身公認会計士〕

中央大学出身の公認会計士は、平成5年6月末現在で1186名、公認会計士数9706名の12.2%を占め、第1位の地位にあります。（因に、第2位慶大1015名、第3位早大885名、第4位明大655名、第5位一橋大370名）。これ偏に太田先生、井上先生をはじめ諸先輩のお力のおかげであります。

協会の役員においても、特殊法人になってからの会長9名のうち、井口太郎先生、川北博先生そして私と3名が中央大学出身であり、現本部役員のうち21名が中央大学出身であります。これを表にまとめますと次のとおりです。

本部役員	総員	内中大	在京	内中大
会長	1名	1名	1名	1名
副会長	7	1	3	1
常務理事	31	9	18	8
理事	40	8	13	4
監事	6	2	2	1
合計	85	21	37	15
比率	100%	25%	100%	41%

中央大学出身の役員は、全国の総員では21名で25%を占め、在京では15名で全体の41%を占めております。このほか、既にご承知のとおり国際会計基準委員会（IASC）の議長に本学出身の白鳥栄一先生が就任しております。

このように、特に中心になって会務を執行している在京役員41%が本学出身者であり、中央大学の公認会計士業界に対する貢献度は極めて高いものと言わなければなりません。

更に現在、協会が実施している東京実務補習所は、お茶の水の中央大学駿河台記念館をお借りして実施しており、協会として大変お世話になっております。

#### 〔協会の役員〕

ここで現在協会本部の役員に就任されております本学出身者のお名前を披露させていただきます。

副会長	金井一夫（東京）	理事	神山敏夫（東京）
常務理事	旗本道男（北海道）	〃	白鳥栄一（〃）
〃	櫻谷隆夫（東京）	〃	杉浦文彦（〃）
〃	木下徳明（〃）	〃	宮野定夫（〃）
〃	小林公司（東京）	〃	長谷川新一（東海）
〃	斉藤力夫（〃）	〃	勝木重三（北陸）
〃	樋口幸一（〃）	〃	中野淑夫（京滋）
〃	福田真也（〃）	〃	中野勉（中国）
〃	藤沼亜起（〃）	監事	川島正夫（東京）
〃	宮内忍（〃）	〃	渡部治雄（中国）

（会員名簿掲載順）

#### 〔おわりに〕

自己宣伝が入ってしまいましたがお許し下さい。

平成5年度の公認会計士第2次試験は、受験生は9538名（前年比1436名増）と多かったものの合格者は717名と前年にくらべ81名の減でありました。そのなかにあつて中央大学出身者の合格は47名で前年に比し7名の増加であり、大変喜んでいる次第ですが、それでも慶大、早大の次の第3位であり人数の差は開いております。われわれに致しましてもっと頑張らなければと思っております。大学と力を併せあとに続く後輩の一人でも多からんことを祈るとともにそのための努力致したいと思います。

# 会報第1号創刊にあたって

中央大学公認会計士会 会長  
川北 博



わが国の会計学史並びに会計人史をたどるとき、中央大学がそのなかで果してきた役割の偉大さに、何人といえども大きな評価を与えざるを得ないに違いありません。

戦前戦中の吉田良三先生、太田哲三先生、黒沢清先生、井上達雄先生等に象徴される学統は、戦後にもそのまま受け継がれ、それは昭和23年の中央大学経理研究所の復活にもつながり、また戦後第1回の日本会計研究学会大会が同年中央大学で開催されたことでも立証されています。

当時私は、戦争帰りのいわゆる復員学生でしたが、幸いにもその学会のお手伝いをした思い出があり、また、経理研究所を通じて白門会計の伝統に身近に接することができました。

昭和24年にはじまった公認会計士特別試験や第2次試験では、当然のように中央大学出身者や在学生在が多年にわたってその合格者中第1位を占め、他の大学を圧倒してきたことは今も語り継がれており、その結果、わが国の公認会計士の出身大学別登録者数は、現在もなお第1位を占めております。

そのような現状にありながら、長い間公認会計士及び会計士補のみによる会がなかったことはむしろ不思議なことで、私も日本公認会計士協会の会長時代に他の大学の公認会計士の会合に招待される都度そのように感じておりました。

そのような背景の中で、「中央大学出身の公認会計士の会を作ろう」という力強い声が、特に第一線で活躍中の公認会計士から出るとともに、たちまち多くの賛同者が集まり、中央大学公認会計士会が生まれました。それまでに至る世話人諸氏の熱意は並々ならぬもので、会発足後もその運営は手さぐりながら、会員諸兄姉のご声援にも支え

られて日一日と姿かたちを整えつつあります。この会報の創刊も、みんなで相談の結果、会員の絆を広く固くして母校の発展にも寄与しようという意図によるものです。

さて、本会創立にあたって、私はいくつかのお願いをしてまいりました。それはまた、この会を創ろうとして集まった人達の共通の考え方でもありました。もちろん、本会の目的や事業は会則に書いてあるとおりで、それをここで繰り返すつもりはありません。以下述べようとするのは、その運営上の基本的な考え方についてであります。

その第一は、この会は、中央大学出身の公認会計士や会計士補（以下「CPA」と総称します）によるそれらのための会であり、特定の人やグループによってそれらのために運営されてはならないということです。特に会長以下の役員は、全体のための奉仕者であって、できることなら早期の交替制が好ましく、その運営がわかりやすくみんなが集まりやすい会にしてほしいということです。

その第二は、この会は、もちろん年輩者の会員の参加を歓迎しますが、より強く若い会員の参加を期待したいということです。過去の経験に鑑みても、母校学生会支部としての組織的要因もあって、一部の年輩者を中心とする会の運営になりがちですが、それは会の発展にむしろ妨げとなります。若き、母校出身の後継者を育てるという標度を年輩者はもってほしいということです。若き後継者たちの参加なき会は、その基本的存在意義を失うことになるのでしょう。

その第三は、この会の会員は、この会によって何らかの利益を求めるよりも、より次元の高い人間集団であろうということです。中央大学という個性あるキャンパスに共に学んできた者同志、そ



のコミュニティを大切に社会の中で役立っていかうというのです。そのためには、みんなの知恵を集めて勉強会やいろいろな行事を工夫したいとは思いますが、それ以前にお互いのつながりを大切にしましょう。

第四には、中央大学の会計学の学統を大切にしようということです。われわれが実務家として研鑽することももちろん必要ですが、このような会に中央大学の会計学に関連する教授グループが喜んで参加する雰囲気をつくっていきたいのです。他の大学に比して、従来の関連諸会での実績はこの点では甚だ空虚なものがありました。この会ではぜひ母校後輩のためにも一歩を進めたいものです。

第五には、この会の現会員のためだけでなく中央大学やあるいは将来の会員である在学生等のためにも本会の事業展開をはかるべきであると考えていますが、それはこの会の実力が逐次充実する

につれそれ相応の貢献をすべきで、形だけの無理な展開をはかるべきでないということです。短兵急な貢献は、その息切れも早いことをわれわれは十分知っており、それだけにステディな発展を求めようと考えています。

以上いろいろ所懐を述べましたが、いずれも皆様同じ考え方のように、現状甚だスムーズに進展しつつあります。しかしながら、かなり大きな集団ですから、何かと問題も生じてこようかとも思われますが、皆様のご協力によって乗り越えてまいりたいと存じます。

最後に、中央大学公認会計士会会報の創刊にご尽力いただいた皆様方に心から感謝申し上げますとともに、この会報が毎年内容を充実して末長く本会とともに発展しますよう、皆様方のご支援をお願い申し上げて創刊のご挨拶とさせていただきます。

## 本会創立後1年間の活動状況

中央大学公認会計士会 代表幹事 増田 浩 二

平成4年10月24日に創立総会を開催して以来1年余が経過した。振り返ると、当初ほんの数人の有志が寄り会って益を交しながら本会設立について語り合い、準備を進めるうちに仲間がふえて設立発起人が300人を超え、その後創立総会に至るまでの期間が1年余りであるから、本会の設立準備と本会誕生後の期間がほぼ同じになったわけである。設立後の本会の活動状況は後記のとおりであるが、会務運営に不馴れなことや執行部の役員が負担できる時間にも限界があり、また財政的制約もあって、あれもしたいこれもやりたいと考えてるうちに時間が過ぎてしまった。会員諸兄から叱責があるのではないかと危惧している。はじめから言い訳になってしまったが、川北会長の御挨拶にもあるとおり、あせらず着実に会務を進めてゆ

きたいと考えている。

### 1. 講演会（平成5年1月26日）

国際会計基準委員会議長白鳥栄一先生（中央大学教授・本会副会長）を講師にお願いし、中央大学経理研究所の御後援を得て、「国際会計基準委員会の最近の動向と日本企業にあたるインパクト」と題して公開講演会を開催した。

時宜に合ったテーマと時の人を講師にお迎えしての企画であったため、本会会員以外の受講者も多く盛会となった。（講演の詳細は別冊の講演内容を参照いただきたい。）

講演会の後、講師を交じえて懇親会を行い、会員間の交流、情報交換など懇親の実をあげた。

### 2. 支部設置承認（平成5年3月26日）

本会は当初より中央大学学会の支部として組



白鳥栄一先生

織化することを前提に設立されたのであるが、平成4年12月に支部設置申請を行い、平成5年3月26日の学員会幹事会において支部設置が承認され、平成5年5月29日の学員会総会で支部旗の贈呈を受けた。これで名実ともに、学員会の支部として、母校中央大学発展のために貢献する態勢が明確になったわけである。

### 3. 第一回総会及び記念講演会（平成5年7月10日）

学員会支部承認後第1回目の総会を記念して、平川忠雄先生（税理士・中央大学会計人会会長）による「現行税制の問題点と今後」と題した講演会が開催された。現在見直されようとしている税制の問題点について講師平川先生ならではの実務的観点からの鋭い指摘解説がなされ、会員だけの内輪の講演会であったこともあり、通常ではな



会場風景

なか聴けない講義内容に接し、受講した多くの会員にとってまたとない有意義な勉強会となった。（講義の詳細は別冊の講演内容を参照いただきたい。）

講演会の前に総会を、またその後に懇親会を行った。懇親会には、本会の設立を披露するという意味もあって、他の大学の公認会計士会の代表を御招待した。（総会、懇親会の詳細は学員時報第312号に掲載されている。）

御出席いただいた他の大学の公認会計士会の代表（敬称略）

明治大学公認会計士会会長	長吉 泉
公認会計士三田会代表世話人	西野 清
桜門公認会計士会会長	篠原徳次
公認会計士法友会会長	神山 孝
専修大学会計人会副会長	平井修造



平川忠雄先生



総会後の懇親会

（3月26日贈呈を受けた支部旗をかこんで、井上達雄先生との記念撮影）

#### 4. 中央大学経理研究所学生との懇談会（平成5年8月6日）

中央大学八王子校舎において、中央大学経理研究所との共催で、同研究所の学生を対象に日本公認会計士協会会長山本秀夫先生（本会顧問）が公認会計士業界および中央大学出身の公認会計士の活躍状況について講演された。中央大学出身の日本公認会計士協会会長を前にして、約300名の学生が公認会計士業務へ強い関心を示し、有意義な講演会となった。その後引き続いて学生との懇談会がひらかれ、渡部裕巨中央大学経理研究所所長はじめ商学部の教授がたを交じて学生と親しく話し合う場となった。

#### 5. 公認会計士第二次試験合格者への記念品贈呈（平成5年10月）

平成5年度の中央大学公認会計士第二次試験合格者は47名である。平成5年10月16日には中央大学経理研究所主催、また同10月28日には中央大学商学部主催の祝賀会が開催された。両祝賀会に本会も招待された。さらに、本会は合格者全員へ将来永く残る記念品として象牙の印鑑を贈呈した。

#### 6. その他の活動

- ① 中央大学学生会主催のゴルフコンペへの参加（平成5年11月）
- ② 役員会 平成4年12月1日  
平成5年4月12日  
平成5年6月15日  
平成5年12月20日
- ③ 幹事長 副幹事長会議 6回
- ④ 会報創刊号及び講演会講義録の作成

## 中央大学関係1993年(平成5年)公認会計士第2次試験合格者

(経理研究所調べ 順不同、敬称略)

氏名	学部・学科	卒業年度
石野 研司	商・会計	H 4
伊藤 俊之	商・会計	H 4
井村 彰宏	商・会計	在 4
江部 則行	商・会計	H 5
萩原 大輔	経・経済	在 4
笠井 義雄	商・会計	在 4
川越 靖彦	商・会計	H 5
金 仁石	商・会計	H 3
木村 徹	商・会計	在 3
小峰 直美	商・会計	在 4
笹森 郁代	法・法律	H 5
始澤 規夫	商・会計	在 4
武田 正光	商・会計	H 4
富整 正浩	大学院	在
中山 寿英	商・会計	H 3
阪 広久	商・会計	H 4
町田 眞友	商・会計	H 5
増子 敦仁	大学院	在
満山 幸成	商・会計	在 4
三村 陵枝	商・会計	在 3
宮下 圭二	経・経済	H 3
森 泰文	商・会計	H 1
渡辺 綾子	商・会計	H 3
阿久津 聖	商・経営	H 1

氏名	学部・学科	卒業年度
新井 隆	商・会計	H 3
石垣 保	商・会計	H 3
石田 伸浩	商・会計	S 60
出田 吉孝	法・政治	H 1
井上 和則	商・会計	S 62
岩田 浩一	商・会計	S 63
鴨下 裕嗣	商・会計	H 1
北埜 順子	商・商貿	H 3
倉知 康男	商・会計	H 3
坂下 幸之	商・会計	H 5
白石 優	商・会計	H 1
須崎 慎太郎	商・会計	H 2
田邊 均	法・法律	S 61
筑間 浩	商・会計	H 3
水流 健太郎	法・政治	H 3
能勢 元	経・国経	在 4
服部 誠治	商・経営	S 63
羽石 清美	経・国経	S 60
東 健一	法・法律	S 59
藤本 周二	法・法律	中退
前田 英雄	商・会計	S 60
三枝 文博	法・法律	S 62
三宅 博人	経・経済	S 63

注) 国経－国際経済学科

## 平成5年2次試験 出身大学別合格者数

1. 慶應義塾大学	109人	6. 明治大学	32
2. 早稲田大学	96	7. 同志社大学	26
3. 中央大学	45	8. 神戸大学	21
東京大学	45	9. 京都大学	20
5. 一橋大学	36	10. 横浜国立大学	19

上記は日本公認会計士協会が実務補習所入所希望者等686名について調査したもので、合格者717名のうち95.7%が調査対象となっています。

## 出会い

### 昭和46年商学部経営学科卒 谷古宇 久美子



私はマーガレット・サッチャーの顔・雰囲気大好きだ。写真でしか知らないが、“青く澄んだ目”が特に好きだ。やさしさ、強さ、熱さ、そして悲しさなど全ての彼女の人間的要素が込められているような気がする。

イギリス保守党党首に選ばれた直後、『夢のようです。』と控えめに語ったという彼女が如何にして政治という、男社会の中で力をつけ偉大な政治家へと成長していったのか、しかも、その過程の中で女性としての魅力をもどんどんつけていったのか、自然に、本当に自然に興味が沸いてくる。

人は長い人生において、さまざまな人との出会いがあり、そこからいろいろなことを学び、そして影響を受けていく。

サッチャーにとっての“出会い”を特筆するならば、父親・夫・レーガンと思われるが、“強い信念”“人間としての愛情”“信頼と尊敬”等、彼女の人間形成に大きく影響を与えている。

私は中央大学というキャンパスで、専門的な知識だけでなく、恩師・先輩諸氏の薫陶を受け、仲間とともに語り合い、競い合い、会計士としてス

タートする基礎固めをさせてもらった。

今、こうやって中央大学公認会計士会会報の創刊にあたりペンを走らせながら、20数年前の種々の中央大学時代の人との出会いがよみがえってくる。

政治の世界にしろ、ビジネスの世界にしろ、あるいは家庭にしろ、あらゆる世界を形成しているのは感情を持った人間であり、“損得の計算”外で大きく支配するのは“好きか嫌い”の単純な人間的感情である。

以前、『無限の未来』と題して我々公認会計士の未来が無限に広がっていくという記事を書いたことがあるが、その中で、私は『我々会計士が無限の未来を手にするには専門的な知識や経験は当然のこととして、何よりも大事なのは相手の心を魅きつけて離さない豊かな人間性とあふれる情熱を有することだ』と主張した。

我々の仕事は監査・税務・経営と全ての領域にかかわっているが、中でも経営助成業務においては、我々はたんに経営改善策や経営の方向性を示すだけでなく、経営者をして実際に経営活動の中

で実行させていかなければならない。

大きく変革する世界経済・日本経済のなかで、しかも逆風が吹いている現状において、我々は経営者からの深い信頼と尊敬の念をうけるだけの人間の魅力をそなえなければならぬ。

会計士という職業について20数年、その間に妻、母となり、いろいろな人と出会い、種々な事を経験してきたが、果して今の自分はどうか、人の心を魅きつけて離さないような豊かな人間性が

あるのだろうか、あふれんばかりの情熱はどうか、日常の繁雑さの中で忘れかけていないかと改めて自分自身に問いかけている。

女性が“女として生きるということ”と“仕事をもつということ”を両立させて生きていく為には男性よりもいくつもの難関を乗り越えなければならぬと思うが、これからも“人との出会い”を大切に、私なりに一生懸命生きていきたいと考えている。

## 公認会計士第三次試験に合格して

昭和59年法学部法律学科卒  
千葉通子



毎日の仕事に追われ、気がついてみたらあっという間の4年間でした。昭和59年、法学部を卒業し、公務員として三年半勤めました。自分のライフスタイルに合わせて一生働けるような資格を持ちたいと考え、公認会計士試験に挑戦することにしました。平成元年、大量合格の波にのり、幸運にも短期間で二次試験に合格し、監査法人に勤務することになりました。

最初の一年間は、慣れない監査補助業務でとまどうことばかりでした。クライアント先で、父親ほど年齢も離れ、社会的地位もある方との会話は、かなり緊張するものでした。また、受験のための表面的な知識のみで仕事についたために、先輩達の話聞いていてもほとんど理解できず、与えられた仕事を仕上げるのが精一杯でした。三年半の社会経験があるとはいえ、まだまだ勉強不足を痛感し、この先やっていけるか不安の毎日だったことを憶えています。

そのうえ、仕事が終わったあとも補習所へ通わなければならず、知識習得の場を与えていただいていたとはいうものの、精神的にも肉体的にもボロボロでした。

しかし、毎日の地味な仕事の中で行っている作

業が、公表される財務諸表の適正性にわずかでも寄与していると思うと、改めて責任の重さを感じました。

補習所終了後は、法人税の勉強を一年間行い、その後、三次試験のための専門学校へ通い始めました。私の年齢では、仕事をしながらの勉強は体力的にもきつく、また、記憶力、集中力とも衰えており、二次試験のときのようにははかどりませんでした。けれども、実務で身につけたことを体系的にまとめあげることができ、たいへん有意義な時間だったように思います。

そして、平成5年2月、無事、三次試験に合格することができました。合格の喜びとともに、この年齢になってやっと試験勉強から解放されたという気持ちでいっぱいでした。二次試験受験のために仕事をやめた時に、安定した仕事を捨ててわざわざ苦勞しなくても、と泣いて反対した親をやっと安心させることができました。

会計士補の時には、上司の指示に従って、与えられた仕事をやりとげるだけでしたが、これからは、自分の責任の範囲内で判断しなければならぬこともふえ、後輩の指導にも力を注いでいかなければならぬなりません。



一方、仕事と家庭の両立は難しいといわれますが、私の場合には、同業の夫の理解のもと、なんとか今までうまくやってくることができたような気がします。

長引く不況のなか、企業のリストラの話題が連

日新聞をにぎわせていますが、これまで直面したことがないような会計事象に対する対応が公認会計士に求められてくるでしょう。私も微力ながらそれに対応すべく、日々自己研鑽していくつもりです。

## 編集後記

黒田克司

中央大学学長外間寛先生の巻頭言をはじめ御高覧の先生方に御寄稿賜り、このたび創刊号として会員の皆様のお手許に会報第1号を配布することができました。御寄稿を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます次第でございます。郵便料金の値上げを控えておりました関係で時間の制約がございましたが、福田眞也副幹事長ほか諸先生方の東奔西走のお陰で何とか間に合わせることができました。

創刊号の発刊に当たりましては、川北博会長、増田浩二幹事長ほか、副幹事長が数回の編集会議を開き検討を重ねて構成を策定いたしました。会報表紙の「絆」と「中央大学公認会計士会会報」は、川北博会長に揮毫していただいたものでございます。

また、本年度開催いたしました白鳥栄一先生の

「国際会計基準委員会の最近の活動と日本企業に与えるインパクト」、並びに平川忠雄先生の「現行税制の問題点と今後」の両御講演につきましては、当日ご出席できなかった会員各位に御高覧頂けますよう創刊号別冊として配布させて頂くことと致しました。両先生には貴重なお時間を割いていただきまして速記録に加筆修正をお願いいたしましたものでございますので、貴重な資料としても会員各位に御利用いただけるものと存じます。改めて、両先生に御礼申し上げます次第です。

なお、本年度の事業計画の一つでございます。公認会計士第2次試験合格者への記念品贈呈につきましては、本学出身合格者全員に印材を贈呈することとなりましたが、手配その他につきましては、樫谷隆夫副幹事長に担当していただきました。紙幅を利用して御報告させていただきます。

### 中央大学公認会計士会報 No.1

平成5年12月20日発行  
発行人 中央大学公認会計士会 会長

川北 博

発行所 〒101 千代田区神田駿河台3-11-5  
中央大学駿河台記念館内  
中央大学経理研究所気付